

インダス・プロジェクト ニュースレター

第6号

2010年1月25日発行

ごあいさつ

われわれのインダス・プロジェクトは、本研究三年目を終えようとしています。来年度から後二年で、インダス・プロジェクトの成果をまとめなくてはなりません。このニュースレターは主にフィールド調査を行った人々の簡単な報告を掲載してきました。論文といった堅いものではなく、紀行文エッセイのように、執筆者も気軽に書いていただきたいですし、読む側も気楽に読めるものでありながら、同時にプロジェクトの活動を知ることができる。そんなニュースレターをめざしています。

昨年度までのプロジェクトでは、遺跡の発掘調査がメインを占めていましたが、本年度からは発掘調査を終え、終了年度に向けてまとめの段階に入りました。ある意味、発掘以上に大変な作業が待っています。インドにおける二遺跡の発掘報告書は来年度中の刊行をめざして、奮闘しております。乞う、ご期待。

本年度のフィールド調査では、古環境復元研究グループがネパール・ララ湖でコアリングを行いました。8月末から先発隊が入り、ほぼ1ヶ月を要しましたが、無事コアリングに成功し、これからの分析結果を待っています。今回のニュースレターには、その際の活動報告を日記という形で掲載いたしました。楽しく読んでいただければ幸いです。

なお、今回掲載した三浦さんの報告はすでに前回のニュースレターに間に合うように送っていただきながら、掲載できなかったものです。この場で三浦さんに謝罪するとともに、今後はこういうことがないよう、細心の注意を払っていく所存です。

コスメとサブリとグローバルトレード —カーンメール農業事情—

三浦 励一（京都大学）

インダス・プロジェクトにおける生業班の役割のひとつに、現代における遺跡周辺地域の生業形態や生態環境を記述することがある。これは、発掘成果から当時の人々の生活や周囲の環境を再構成しようとする際に、一種のレファレンスとして役立つだろうとの考えによる。このような調査のためには、対象地域がなるべく近代化されておらず、できることなら自給自足的な生業形態をとめているほうが都合がよい。カーンメールのような辺境ならば、その条件にあてはまるのではないかと思っていた。それがあっさりと裏切られてしまったというお話である。

2009年1月、私はカーンメール村の航空写真を持って歩き回り、耕地の1区画ごとに冬作（または夏～冬作）として何が栽培されているかを記録してみた。その集計はまだできていないが、一見して栽培面積の大きかったものは、ワタ、ヒマ、マスタード、クミン、コムギと、初めて目にするインドオオバコの6種であった。ガンジーの時代からグジャラートが綿花の産地であることは有名だし、インドで重要な食材であるマスタード、クミン、コムギが作られているのもわかる。しかし、ヒマとインドオオバコは何のためにこれほど大量に栽培されているのだろうか？ 少なくとも、村内で消費されるものではない商品作物であることは聞き取りでわかった。また、これらの作物が、カーンメール村だけでなくカッチ地方の広い範囲で大々的に栽培されていることも、車窓からの眺めでわかった。その先は、帰国後に文献とインターネット検索で調べることにした。以下はそのまとめである。

※ ※ ※



図1 ヒマ

ヒマ（図1）は、トウゴマともよばれ、学名は *Ricinus communis*。種子からヒマシ油（蓖麻子油、castor oil）が得られる油料作物である。ヒマの種子には強い毒性があるが、油を絞った際、毒成分は絞りかすのほうに残る。ヒマシ油は食用にはならないものの、古来、灯用および薬用（下剤・皮膚病薬）として使われてきた。ヒンディー名は Arandi。サンスクリット名は Eranda となっているが、文献にどのような形で現れるのかは調べていない。

現在、世界のヒマ種子の65%はインドで生産され、さらにインド国内生産の86%をグジャラート州が占めている。アーメダバードやブジの周辺には、ヒマシ油を絞って精製する工場がいくつもある。近年の統計では、インドは毎年15～20万トンのヒマシ油を輸出しており、これはインドに60～80億ルピー相当の外貨をもたらしていると考えられる。ヒマシ油を大量に輸入しているのはEUとアメリカで、日本も年に2万トンのヒマシ油を輸入している。この大量のヒマシ油は、先進国でどのように使われているのだろうか。

調べてみてわかったことだが、ヒマシ油は一般的な他の油脂と異なり、化学工業的にさまざまに性質を変えることのできる特異な化学構造をもっており、化粧品、医薬品、潤滑剤、塗料、インクなどに配合される基材の合成原料として欠くことができない。このため重量あたりの価格はナタネ油やダイズ油の3倍になるという。車やオートバイが好きな人なら、エンジンオイルの有名ブラ



図2 インドオオバコ

ンド Castrol を知っているだろう。この名称は、同社の初期の製品で原料とされたヒマシ油の英名 castor oil に由来しているという。

化粧品類の成分表をよくみれば、「ポリオキシエチレン硬化ヒマシ油」とか、「PEG-40 水添ヒマシ油」などという名前が見つかるだろう。これらはヒマシ油に化学的な修飾をほどこしたもので、水とも油ともなじみやすく、本来混じり合いにくいさまざまな配合成分を均一な液状、乳状あるいはクリーム状に保つはたらきをもっている。ナチュラルやオーガニックをうたう化粧品には、精製ヒマシ油そのものが配合されていることもある。こんなわけで、「コスメ」のびんやチューブを手にとってみたとき、その中に何らかの形でグジャラート産ヒマシ油が含まれている確率は、かなり高い。

次にインドオオバコ *Plantago ovata* (図2) であるが、別名サイリウム、イサゴールといえど「え！もしかしてあれのこと？」とピンとくる人もいるだろう。いわゆるオオバコダイエットに用いられる、サプリメント食品の原料植物である。インドオオバコの種皮の表面には多糖類の層があり（日本のオオバコにも少しある）、これが水を吸うと膨らんで寒天のようなになる。食事の前に水や野菜ジュースでその粉末を飲むと、胃の中で水を吸って膨張するので、食事を控えめにしても満腹感が得られるというわけだ。さらにこの寒天状物質は糖やコレステロールの吸収を抑制する効果もあるし、食物繊維であるから便通もよくなり、一石三鳥くらいの効果があるとい

うことらしい。

インドではこの植物は isabgol とよばれている。これは「馬の耳」を意味するペルシャ語名からきているそうで、種子の形がそれを連想させることによる。日本では「イサゴール」と表記されているが、カーンメールでは小さく b の発音が入るように聞こえた。欧米では植物名が psyllium、その種皮が isabgol と表記されている。

世界のインドオオバコのほとんどすべてはインドで生産されている。生産の中心はラジャスタン州にあるが、集荷・取引の中心地はアーメダバードからカーンメールに向かう道をちょっとそれたところにある Unjha であるという。水を吸うと寒天状になる種皮を収穫して出荷するには水に濡らさないようにすることが肝心で、種子の成熟期から収穫期にかけてはわずかの降雨も大敵である。冬から春にかけて絶対に雨の降らないインド西部は、この植物の栽培適地というわけだ。

インドオオバコの市場状況についてはかけ離れた数字がいくつかあって正確なところはわからないが、ネット上のある情報によれば近年のインドでの生産量（種子）は9万トン前後であり、その80%が輸出されており、価格は1kgあたり40ルピーかそれ以上。この数字を信じるならば、インドオオバコはインドに年29億ルピー相当の外貨をもたらしていることになる。なお、最大の輸入国はというと、その効能から容易に察しがつくとおり、アメリカ合衆国である。アメリカのオオバコダイエット商品ではP&G社の「メタムシル」が有名らしい。

いささか胃がもたれる話になってしまったかもしれない。とにかくこのようにして、現代のカーンメールの農業は世界経済に片足をつつこみ、わたしたちの現代生活とつながっているようなのである。それも、受け身でそのような状況にからめとられていたということではないらしい。話を聞いたある農家は、インドオオバコはもうかるというから種を買って作ったのに、いざ出荷のときになったら期待したほどの値がつかないと不平を言っていた。次に会ったときのあいさつは、「もうかりまっか？」にしようかと思う。

参考ウェブサイト

<http://www.articlearchives.com/marketing-advertising/price-management-price/1781319-1.html>

<http://www.business-standard.com/india/storypage.php?autono=281496>

<http://www.crnindia.com/commodity/castor.html>

<http://www.thehindubusinessline.com/2008/02/20/stories/2008022051151500.htm>

http://en.wikipedia.org/wiki/Castor_oil

<http://en.wikipedia.org/wiki/Psyllium>

※相互に重複する情報が多いので、文章に対応させずに一括して挙げた。

ウッタラカンド州の実地調査とビンサル・セミナー

大西正幸（総合地球環境学研究所）

今年の7月2-5日に、長田、大西、カラクワールは、ウッタラカンド州の東部、ビンサル（Binsar）のカーリー・エステイト（Khali Estate）で開かれた、'The Himalayan communities, cultures and traditional knowledge: the twenty-first century challenges and strategies for conservation' というタイトルの国際セミナーに参加しました。また、セミナーの前後、長田と大西は、カラクワールさんの案内で、彼の生まれ故郷の村や周辺の地域を調査しましたが、旅行中、彼の二人のお兄さんとそのご家族（長兄とその家族がアルモラー（Almora）、次兄とその家族がカータゴードム（Kathgodam）に住んでいる）からは、まさに至れり尽くせりのおもてなしを受けました。以下、この時の体験を、大西の視点から、日誌風に報告します。

6月28日

大西はカルカッタから飛行機でデリーに到着。すでに到着していた長田さん、カラクワールさんと、ニューデリーのホテルで合流する。その夜、オールドデリーの駅から、カータゴードム行きの夜行寝台列車に乗る。

6月29日

朝6時前にカータゴードム駅に到着。カラクワールさんが手配してくれていた車に乗り、まず、駅の近くにあるカラクワールさんの次兄の家に立ち寄り、朝食をご馳走になる。ジャガイモのパラター（バター油ギーを折り込んだ焼きパン）がおいしい。ご家族や、たまたま訪問されていたカラクワールさんの四兄、妹さんなどと歓談する。8時頃、皆に見送られて、ナイニタール（Nainital）に向かう。

ナイニタールは、英領時代から続く有名な避暑地で、湖の周辺にはインド人旅行者向けの小さなホテルが軒を



ナイニताल

並べている。湖の両側の急な勾配に沿って細い道が続き、それを辿って谷の中腹まで登ると、英領時代の古い建物が多く残っている。英領時代は、湖の周辺の低地が現地人ネイティブ（つまりインド人）の居住区で、白人の居住区は湖を見下ろす高台に作られたということだ。ここでは、カラクワールさんの大学の友人、ギリジャー・パーンデー（Girija Pande）さんの案内で、地元の新聞「ナイニताल・ニュース」（Nainital Samacar）の編集／出版を長年続けているマヘーシュ・ジョーシー（Mahesh Joshi）さんや、ヒマラヤ地域の伝統文化／社会の記録を40年以上続けているシェカル・パータク（Shekhar Pathak）さんの家を訪問。その道すがら、英領時代の療養所兼パン工場だった広大な建物を見学する。ギリジャー・パーンデーさんの家で昼食をご馳走になった後、ナイニतालの町の外に住む、著名な歌手／詩人で森林保護運動の旗手だったという、ギルダ（Girda）の愛称で知られるギリッシュ・ティーヴァーリー（Girish Tewari）さんの家を訪問、歌やインタビューを録音する。その後、山間のくねくねした道を車で2時間ほど走り、もう一つの避暑地アルモラーに到着。まずカラクワールさんの長兄の家に寄り、その後、目指すD. P. アグラール（D. P. Agrawal）さんの家に向かう。彼は、長田さんとカラクワールさんの友人で、長田さんの日文研時代に日本を訪れたことがある。大学を引退後、この自宅をオフィスに、「民俗知センター」（Lok Vigyan Kendra）を立ち上げ、民間に伝わる伝統文化の継承に力を注いでいる。今回のセミナーを企画運営したのも彼だ。彼のオフィスに、セミナーの運営を手伝っている若いスタッフが、入れ替わりやってくる。

4人でセミナーの打ち合わせをした後、この日、長田さんと私はそのままアグラールさんの家に泊まる。



カラクワールさんとその家族

6月30日

朝、猿が屋根を伝う音で目が覚める。寝室の外側にある廊下兼小部屋の窓から外を見ると、ベランダを我が物顔で徘徊する猿たちの姿が見える。その下には、アルモラーの谷が一望のもとに見渡せる。急な斜面に沿って人家の屋根やベランダが隙間なく並び、谷の向こうは少し朝靄がかかっている。

長田さんと私は、午前中、若手のスタッフの案内で、女神ナンダー・デーヴィー（Nanda Devi）のお寺や、町のバザールを見て回る。ナンダー・デーヴィーは、ウッタラカンド州に聳える、インド国内では2番目に高いヒマラヤ山系の山の名であるが、同時にこの地域で最も人気のある女神として神格化されている。この女神は、伝承では、シヴァ神の奥さんから村の娘まで、いくつもの層にわたる役割を担い、この地域を中世に支配したチャンド王朝の守護神でもあった。周辺の少数民族が育んで来た基層文化と後から来たヒンドゥー教との混濁を、象徴的に示す例である。

見学から戻り、お昼過ぎに、迎えに来てくれたカラクワールさんと、同じ市内にある彼の長兄の家へ向かう。長兄の家族に加え、高齢のお母さん、昨日会った四兄等と歓談、昼食をご馳走になる。昼食後、カラクワールさんの故郷の村に向かう。カラクワールさんの二人の姪も手伝いに来てくれるというので、5人で2台の車に分乗して行くことになる。

アルモラーから小1時間で村の入り口に到着。村全体がカラクワール姓の、農耕を営む人たちで構成されているのだと言う。村の入り口から荷物を担いで15分ほど畦道を歩き、カラクワールさんの家に辿り着く。お母さんがアルモラーの長兄の家に移ってしまったので、家にはしばらく、誰も住んでいない。長屋風3階建て



カラクワールさんの故郷の村

田植えと儀式

の家で、1階は牛のための藁などが入った納屋。美しい模様が彫り込まれた入り口から階段をのぼり、2階に入ると、前面が寝室兼居間、建物の後ろ側が神棚や竈のある家の中心部になる。3階は建物の後ろ半分に部屋があるだけで、ふだんは物置に使われているのだろうが、私たちの滞在中は台所代わりになっていた。その部屋の前が屋上のベランダに続いている。この建物全体が、階段を挟んで、だいたい同じ作りの隣家と接している。前庭には、近所の人たちとの行き来や、稲の収穫時には脱穀などにも使われるのであろう、開かれた空間があり、その向こうに、2頭の牛を繋いだ仕切りと、野菜を植える小さな畑がある。東インドの、中庭をコの字型に囲んで、一つの大家族で閉じた空間を作る家の作りに慣れていた私の目には、この家の作りは大変新鮮に映った。屋上のベランダからは、村全体が見渡せる。見渡す限り、緑の棚田と森に囲まれた、日本の農村といっても通用しそうな光景である。

7月1日

この日は家の中や村を探索した。まず朝食前に、2階の、私たちが泊まっていた寝室の奥側にある部屋部屋を探索する。家の守護神を祭る神棚のある部屋、竈のある

本来の台所があり、米の大きな貯蔵櫃、ギー（バター油）やヨーグルトを入れる容器等、米と、牛や水牛のミルクの加工品が中心の、豊かな食生活が伺える日用品がたくさん並んでいた。

朝食のあと、今度は、家を出、畦道を通って、村の鎮守のお寺に向かう。カラクワールさんの他、隣家の男性も案内に着いて来てくれる。途次、カラクワールさんから、薬用に使われるさまざまな野草について、また、路上にある銅の破片と、このあたりで銅の精製が行われていたこととの繋がりを教わる。

鎮守のお寺は、中にこれといった神像は置かれていなかった。カラクワール村の外郭に住むラーム（指定カースト）姓の人々もお参りできるのだと言う。ヒンドゥー色が薄いのはそのためだろうか。寺の前に灰や土の盛り上がった箇所があったが、ここで年に一度、ラームも含めた村中の人々が集まって火を焚き、その周りで踊り、料理した食べ物を食べ、祝うのだそうだ。この後、隣村の鎮守のお寺も訪れたが、まったく同様だった。歩いて行く途次、田植えをしている女性たちの一群に会い、田植え歌を録音させてもらった。横一列に並んで歌いながら田植えをする様子は、さながら日本の昔の農村風景で



出立の儀式

ある。田んぼのすぐ横の畦道には、儀式に使われるのであろう、葉の上に米粒と赤い辰砂を入れたものが置かれていた。

お昼まで散歩して、村の入り口まで戻ると、ちょうど学校を終えた子供たちが歩いて帰ってくるのとすれ違った。カラクワールさんの知り合いの店でお茶をご馳走になる。

帰宅すると、隣家から昼食に招待され、カラクワールさんの二人の姪も含めた五人で出かけることになる。黒いダール豆とご飯のキチュリ（おかゆのような混ぜご飯）だった。ついでにこちらの中を見せてもらう。午後のはんびりと過ごし、私は、お母さんの命令で庭仕事に精を出すカラクワールさんから、仕事の合間合間に、この地域の年間の儀礼や暦、民間伝承について教わった。

7月2日

6時に起きて出発の準備をする。出発前、出立の儀式がある。私も長田さんも、家の神棚のある部屋で、額に赤と黄の印と米粒をつけてもらう。出かける直前になって、2軒隣の家から突然招待を受ける。田植え前の会食をしていて、ぜひ食べて行けと言う。この村に来た時から、そのいかにも人の良さそうな笑顔で私と長田さんを魅了していた老人である。それでいちおう招きを受けて二人で家の中に入り、会食している人々に挨拶をし、ハルア（甘菓子的一种）をいただいただけで辞することにする。

村の入口で、車が来るのを待つが、なかなか現れない。その間に、憑依によって治療を行う、伝統的な治療師が通りかかったので、その人と話をする。

10時半に2台の車が到着。2日間の滞在の別れを告げて、アルモラーへ向かう。

アルモラーでは、またカラクワールさんのお兄さん



セミナーの様子

の家で一服し、2人の姪に別れを告げて、私たち3人で、ビンサールに向けて出発。1時間あまりでカーリー・エステイトに到着。ビンサールは中世のチャンドラ王朝の王都で、現在はヒマラヤ山系を見渡す高原の避暑地となっている。会場となったカーリー・エステイトはヒマラヤ山系を目の前に見渡す広大な敷地に建てられた宿泊施設。中心の邸宅は英領時代にイギリス人によって建てられたもので、ガンディーが滞在していたこともあり、その時使われた書斎も保存されている。敷地内に広々とした2階建ての円柱形のバンガローがいくつも建てられ、我々はそれぞれその1室を割り当てられる。ビュッフェ形式の昼食のあと、セミナーが午後3時過ぎから始まる。

ビンサール・セミナー（Binsar Seminar）：

7月2日午後—5日午前

このセミナーは2つの団体の共同によって主催された。一つは、前述の通り、D. P. アグラールさんが代表を務め、ヒマラヤ地域の伝統文化の記録／保存活動を行っている、民俗知センター。もう一つは、ガネーシュ・デーヴィーさんが代表を務め、主に西インドの少数民族の言語や文化の記録／継承活動にかかわっている言語醇化出版センター（Bhasa Samshodhan-Prakashan Kendra）である。

セミナーは次の3つのセッションに分かれ、3日間で計20の、実に多彩な内容の発表があった。最終日の7月5日は発表がなく、午前中を使つての総括討論となった。

1. Traditional Knowledge, Oral Traditions, Art Practices and Life-styles



セミナーの出席者たち

2. Himalayan Environment — Ecology and Economy

3. Communities — Culture, Social Transition and Negotiating Modernity

私は 'Documenting the Oral Culture of Bengal' という題の発表を最初のセッションで、またカラクワールさんと長田さんはそれぞれ 'Rice Rituals and Agricultural Rites in Central Himalayas', 'Rice Rituals among Mundas of Jharkhand' という題の発表を、2つ目のセッションで行った。長田さんは初日、二日目と体調を崩していたので、予定をずらして7月4日の夕方の発表となったが、発表開始と同時に突然大雨が降り出すというハプニングに見舞われた。ともあれ、3人とも発表は順調に終わり、参加者からは多くの好意的なコメントや情報が寄せられた。

ところで、このセミナー全体のタイトルは 'Himalayan communities' となっており、確かに発表者の大部分はヒマラヤ地域の伝統知にかかわって来ている人たちののだが、私たちやガネーシュ・デーヴィーさんのように、専門が必ずしもヒマラヤではない人たちもいたし、アグラワールさんの基調講演やガネーシュ・デーヴィーさんの総括では、グローバリズムによって失われつつある伝統知というコンテキストの中で、インドの知的伝統を総動員して、どのような行動を取るべきか考えよう、というふうに問題が立てられていた。だから、ヒマラヤの問題を、個別の問題としてではなく、インド全体、あるいは世界全体で失われつつある伝統知の継承という視点から捉えるという視点ははっきりしていて、私たちの発表もその点では多に貢献できたように思う。このようなテーマのセミナーがインドで開かれるというのは、画期



チタイー寺

的なことではなかろうか。

また、私たちとしては、セミナーを通して、インドの基層文化の記録活動を担っている研究者たちと交流でき、密接な協力関係を築くことができたのは大きな収穫だった。

7月5日

セミナーが無事終わり、昼食を取ったあと、参加者はみな、三々五々、別れを告げてビンサールを去って行く。私たちもアルモラーに向けて出発。いったんカラクワールさんのお兄さんの家に行き、疲れの出た長田さんをそこに残して、私、カラクワールさんと二人の姪の4人で、郊外にある古いシヴァ神の寺院ジャーゲーシュワル寺 (Jageshwar Temple) を見に出発する。

ジャーゲーシュワル寺はアルモラーから三十数キロ、1時間あまりのところであり、途中、ヒマラヤの全景が見渡せそうな眺望の峠まで上ったあと、谷を一気に下って、ヒマラヤ杉の鬱蒼と茂る川沿いの道をしばし行く。その道の行き止まりに、9世紀から13世紀にかけて建てられたという大小の石造りの寺院が並んでいる。シヴァ神とその妃神たちの、さまざまな寺院である。当

時、東インドも含むインド各地から巡礼者たちがやって来たということで、大きな寺院の壁には当時のブラーフミー文字でたくさんの落書きが書かれている。私は仏教が伝わった跡でもないかと思って気をつけていたのだが、そのような痕跡は見つからなかった。寺院の近くにある博物館を見るのを楽しみにしていたのだが、残念ながら閉館の時間にかかってしまい、中を見ることができなかった。

帰る途次、チタイ寺（Chitai Temple）に立ち寄った。ここはシヴァ神の生まれ変わりとされる「正義の神様」ガウル神（Golu Devata）のお寺で、山のような裁判文書が、たくさんの寄贈された鉦とともに飾ってある。裁判で正義の裁きがあるよう祈願して、インド中から手紙を送って来る人が絶えないという。ガウル神は、民間伝説では、チャンド王朝の正嫡の王子で、継母や異母兄弟からさまざまな迫害を受けるが、最後には王子として認められることになるという。寺院の中には、その颯爽と白馬にまたがる姿が飾ってある。

こうして日暮れ時にアルモラーに帰還。少し元気になった長田さんと、帰る荷物の整理をし、カラクワールさんやその姪たちとは写真等の資料の交換をする。夕食の後、早々に休む。

7月6日

早朝、6時に起きると、出発前に、また額に赤と黄の印と米粒をつける出立の儀式がある。車を待つ間、ご家族が軽食を用意してくれる。カラクワールさんのお兄さんからは、ガネーシュ神の像をお土産にいただく。別れを惜しみながら、車に乗り込み、出発。

カラクワールさんは、病気の三兄を見舞いに行くとのことで、途中のハルドワーニー（Haldwani）で別れる。その後、快適なドライブが続き、私と長田さんは、夕方、無事デリーに帰還。

こうして、一週間あまりの充実した旅が終わりました。カラクワールさんやそのご家族には、旅行期間を通して、何から何まで世話をさせていただきました。この場を借りて、改めて感謝したいと思います。また、今回の調査やセミナーで知り合った研究者とは、インドの少数言語や基層文化の研究をめぐって、データや情報の交換、言語研究班のメンバーとの共同の調査等を通して、今後も交流を続けて行くつもりです。来年もまた、そうした活動の報告ができればと考えています。

ララ湖コアリング調査隊日記

■はじめに

長田俊樹（総合地球環境学研究所）

インダス・プロジェクトでは、昨年8月末から9月中旬にかけて、ネパール・ララ湖でのコアリングを行いました。無事コアリングに成功し、5本のコアを採取することができました。船便で日本まで運ばれ、12月末ようやくコアが高知大学に到着しました。したがって、分析はまだ始まったばかりです。

コアリング調査のメンバー（以下敬称略）は、下準備を行なった古環境復元研究グループのコアメンバーの前杵英明（広島大学）はじめ、八木浩司（山形大学）、コアリングを担当した岡村眞（高知大学）、松岡裕美（高知大学）、植物担当の三宅尚（高知大学）、東北大学大学院生、山田智輝、東京大学学生、中村淳路、それに地球研から寺村裕史と長田が参加しました。

また、ネパール側からも、国立公園管理官のギャワリーさん、地質学者で信州大学への留学経験を持つアディカーリーさん、日本人のお母さんをもつ医者の方、コーディネーターのダワさん、それにポーター6名が参加されました。

ララ湖は標高3000mにあります。行く前には人がほとんどいないのではないかと想像していましたが、意に反して多くの人が行き交う場所でした。ネパール人の旅行者が多いのにはびっくりしました。海外からも旅行者は多く、イタリア人やカナダからの女性一行様、ドイツ人などに遭遇しました。ヘリコプターでララ湖に入った頃は、まだ雨季が明けず毎日雨でした。昼からは風も出て大変寒い中、コアリングは行われました。ちょうど中日あたりに雨季が明け、後半は天気にも恵まれ、4000m級の山にも登りましたし、近隣の村にも行きました。

キャンプ生活は探検部上がりの長田には想像すらできないものでした。ピザやスパゲティ、はてはケーキや寿司まで食卓に並ぶとは、思ってもいませんでした。あまりの食事の豪華さに、「粗食に耐える」をモットーとする長田はお腹をこわすほどでした。コアリングがうまくいったことに加え、独特の日本語（マヤ方言？）を駆使して、一人目立っていたマヤ・ドクターの超ポジティブ・シンキングのおかげで、楽しい調査となりました。後半



やせ細った馬



スルケット

は「帰りたくない」を連発し鬢髻を買いましたが、この日記もその楽しさの一部が伝わればと、ここに掲載するしだいです。なお、この日記は原文をそのまま掲載するのではなく、編集が加えられています。日記を打ち込んでくださり、さらに編集の労を執ってくださった山田智輝さんに、名をあげて謝意を表したいと思います。

■調査隊日記

※日記記入者は日付の後にカッコ付で記名

9月3日（八木）：カトマンドゥからネパールガンジへ

朝 7:00 朝食。Sunset View の和朝食は、体調を整正するにはもってこい。昼メシがいつ食べられるかわからないので、ハラ一杯食べる。

7:30 荷物をまとめてロビーへ。二次隊のバンザイ三唱をうけて出発。

空港では駐車場からポーターさんたちに荷物をもぎとられ、一人 50 ルピー払わされる。コーディネーターの K.C. さんが後から来る。現地ガイドを取り仕切るダワさんは少し遅れて、キャンバスバッグを運んで来る。5 人分の荷物は 90kg。エクセスなし。

8:35 頃 搭乗待機室に Yeti Airline のバスが来て、Call アリ。BAeJetstream は Twinotter より大きめ。30 名近く乗れる。満員。

9:00 離陸。4500m 程度でマナスル山塊見える。6000m まで上昇して、より明瞭になる。後方にランタンが雲上に顔を出す。しかし、アンナプルナ、ダウラギリは雲に隠れている。西方に進むにつれ、天候悪化。ネパールガンジ空港着陸直前は、最悪となる。前日のインドのアーンドラ・プラデーシュ州首相遭難のニュース

が頭をよぎる。滑走路直前で Touch Down? と思うほどのギリギリの着陸に肝を冷やす。

ネパールガンジ空港ではドシャ降りの雨の歓迎をうける。バンダ（ストライキ）で雨の中を人力車で移動かと心配するが、K.C. 氏が宿に車を手配してくれなんとかなる。しかしカトマンズで「Water Proof」と説明されて購入したバッグは完全に Water Free で、松岡さんは少々怒っていた。今日はスルケットへ行くはずだったが、バンダのおかげでネパールガンジの Traveller's Village というホテルに宿泊することになる。

10:30 というとなんでもなく早い時間に沈殿決定なので、宿も空いていなく、お昼まで食堂で暇をつぶす。部屋に移って昼食。ヌードルスープはダメだった。

2:30 から、雨もあがったので、ネパールガンジ観光へ出掛ける。トリブバアン像を大阪の食いだおれ像のようだという声があがる。Surely！確かにそうだ。旧市街南のヒンドゥー寺院まで行って U ターン。

新しい広い道で馬車をひろって帰る（容赦なくムチ打たれるやせ細った馬を見て、少し心が痛む）。松岡さんが食べ残しのトウモロコシを与えるが、馬がはき出したので、皆がっかり。火を通したトウモロコシは口に合わないのだろう。

6:30 からタメシ。明日はバンダもないので 7:00 朝食、7:30 出発！

雨のネパールガンジは案外涼しい。

日中雨が降って薄暗いと、ホテルのシャワーは冷水のみ。夕方晴れ間が出て温水がでるようになった。

9月4日（岡村）：ネパールガンジからスルケットへ

7:00 朝食（Mr.K.C. を除き American Breakfast）。

7:30 スルケット向け出発（Toyota HiAce Long



調査機材の積み卸し



ストライキの様子

Body、14人乗り)。ディーゼルエンジンとおぼしき音。昨日の大雨により、処々に泥濘あるも、Metal Road（穴ボコ少し）にて快走。Highway Crossingにて検問（停車中にヤシ殻付コブラ求む。3ルピー。ナイフで削るも固く、ポソポソとした味。甘みなし。ケーキトッピングのココナッツの「生」と気付く。

平野部は米作地（すでに刈り取り後）、水田は小さく（1 α 平均）、相続制度を知りたい。山麓に近く、ゆるやかな起伏、well-rounded Gravel を売る店道端にあり。

8:50 丘陵部に入る。サラの木（八木談）の森続く。5月には白い花が樹冠に咲き、一週間でしばむソウダ。諸行無常とはこのことを言うのと八木談話。平野から+500mで北の傾斜した砂泥互層（礫層ではない）に団結度から新第三紀層的ではあるが、early Pleisto.の可能性もあり、年代決定はどのような化石でやるのか？難しそう。砂岩表面にはキラキラと白雲母片（ソースの片岩起源）が多く、砂岩が剥離性をもつのはこのためか？

10:00 山中に入る。所々泥濘あり。最近崩落した斜面処々にあり。車一車線分、土砂排除。ほぼ垂直に地層もあり、thrustの近くか？歩けば地表情報の理解は難しくなさそう。

10:30 川を渡る。東南アジアの国の橋としては非常に立派（ケタも太い、戦車用の北海道を思い出す）。茶店はバス。

11:00 前 スルケット着。ホテルとは思えぬ、4階建て（2nd floorに八木、松岡、岡村、1st floorに山田氏入室）。八木さん空港まで登場予定のヘリの状況を偵察。ヘリ会社は何の連絡も受けていないとのこと。スルケット空港にあるヘリ、全4機中2機が衝突破損した後、2機体制で、食糧輸送がタイトだと「負」の情報入る。前杵さんから、植物検疫のための書類、カトマンドウの

Hotel Sunset に届いたとのデンワ。

14:30 Hotel Teesta にてダルバート、タルカリ昼食（今後省略）。洗濯のあと、シャワー。ぬるめの水、快適。スルケットの市街地は斜面にあり、ネパールガンジ（東京）に対する軽井沢か。昼すぎ 30℃あるも、湿度低く、室内 Fan で快適。

道端のカートには、リンゴ>バナナ>ザクロ>青ミカン（「>」は量の差を表す）、いづこのカートも同じものだけ。インド側から来るらしい。いつもサラダに付いてくるスダチ=カラマンシ=シークワサーが大型の酢ダチに変化した。

17:00 カトマンドウ本隊から、ヘリ会社へ手つけを払ったとのレンラクあり。カーゴトラックは今夜中にスルケット着のレンラクあり。すべて順調かつ周到。

19:00 ダルバート・タルカリ（いつもの）。うまい。高知の食事より、スパイシーでない。辛味欲しい。

20:30 雷、やや強い雨。明朝までは止むように祈る。明日 6:30 朝食、7:00 空港へスタート予定。ウインチ台座の木材打ち合わせ。請安息把。

9月5日（松岡）：スルケット 調査用機材到着

朝 5:00 前に「アッラ〜」の声でたたき起こされる。ネパールではイスラム教徒は 4.3%（地球の歩き方によれば）にすぎないが、その 4.3%がホテルのウラにあるらしい。天気はくもり。なんとなくもやがかっているが、晴れそう。

朝食はチャーと揚げパンみたいなフワフワしたもの。ネパールのひとはごはんはたくさん食べるようだが、朝はこんなもので足りるのだろうか。チャーはいつでもどこでもおいしい。

7:30 にホテルを出て空港へ。ホテルのオーナーの車

だというマレーシア製のフィットがビッツ(ヴィッツ?)かという小型車に運転手+5人の6人でギュウギュウ。新車のニオイのする車だが、このような道路ではあっという間にボロボロでしょう。

空港に到着するとすでにトラックが待っていた。ナイスタイミング。さて、この大荷物をどうやって降ろすものかと心配していたが、K.C.さんがあーだこーだ指示して、なんだかんだで一時間ちょっとで終了。自分で何も運ばなくてもいいって、海外はホントに楽。7月13日に高知を出て、マラッカ海峡を通過、インドを抜けてここまでやってきた荷物は(船外機のラックがこわれたことを除けば)ほぼ元気でした。いやーすごい。しかも予定どおりだ。

その後エンジン(発電機)チェックを行う予定も、ガソリンが必要なことからキャンセルされ、あとはバッテリーを充電してもらうだけ。ホテルに帰って車屋さんへと向かったが、今日は土曜で店は休み。結局町をぐるっと一周してホテルへ戻る。途中から雨。八木さんはリンゴ、岡村さんはザクロを買ってくる。リンゴは見た目はとても食べられそうにないが、むいたらけっこう美味。ザクロも一見すっぱそうだが、なかなかおいしい。タネのないザクロを誰か品種改良して下さい。

午後は晴れてヘリが荷物を運んでいる。がんばって仕事をかたづけてほしい。といってもいまのところばっちり順調なので、数日待ってもOKですが。

今日も午後はウダウダです。ララ湖へ行ったら大変だろうなあと思いつつ、やっぱりウダウダ。土曜日でも店は半分以上openしている。街中は散歩なのかショッピングなのかよくわからないが、とにかく歩いている人がたくさんいる。

赤い旗(?)をかかげたジープが何かわめきながら走り回っている。マオイストか?その後夕方になってたいまつを手にしたデモ隊が街中をねりあるいていた。30人程度だが、何を主張しているのかは不明。

昨日ネパールガンジの街でもデモ隊に出会っており、おとなしい感じのネパールの人も、やる時はやるのですね。夕食は昼食と同じくダルバートタルカリ。毎食同じような、違うような、よくわからないが、まあおいしい。今夜はほぼ満月らしい。つきなみだが月がとっても美しい。街中は暗くなっても散歩する人が多く、なんとなくザワザワしている。車が少なく人の動きを感じることができる。



スルケットのホテルの子供

9月6日(山田):スルケット 後発隊合流

早朝、昨日と同様に爆音コーランで目が覚める。しかし昨日とは異なり、起こされた直後に再び就寝。だいぶ図太くなってきた。

本日は朝に予定が無いため、いつもより遅い8:00に朝食。昨日の反省を生かし、チャパティ(名称は不正確かも)と豆のカレーと一緒にいただく。豆のカレーは若干塩辛かったものの、おいしかった。チャーは今日もうまい。

9:00に作業用のバッテリーを充電するために街に繰り出そうということになった。ロビーで待っていたが、皆さんは一向に下りてこない。ホテル従業員の写真を撮る。ネパールの方は、中には恥ずかしがる人もいるが、概ね好意的に写真を撮らせてくれる。子供番組に見入っている男の子がとても愛らしい。

バッテリーの充電はホテルの従業員がやってくれることになったので、一同でホテル周辺を散策。雨はほぼ止んだ。ホテルの窓から見えるバザールへ。このバザールは貴金属アクセサリーを扱っているようだ。職人さんがその場で製作している。指輪の値段を尋ねると、2000ルピーとのこと。高い!しかし日本円にすると2000円

強。ものの出来を考慮すると、決して高くはない。金銭感覚がネパール用のそれになっているようだ。周囲を一周し、各自少々買い物をしてホテルへ。また雨が降り出した。

12:00 頃、一同で集まり談笑。岡村先生にヒモの結び方を教わる。また、岡村先生が先程市場で購入した米粉で団子を試作された。ゆでて食してみたところ、なかなかいける。しかし粉は米粉ではなく、小麦粉だったようだ。薄くのばしてやいたらナンになりそうだ。

昼食は八木先生の提案で、チャウチャウ（インスタントラーメン）をホテルで出してもらうことになった。具はカリフラワー、タマゴ、トマト、インゲン豆など。何味なのかはよくわからなかったが、とてもうまかった。

4:00 頃、後発隊が到着。中村さんが自分の部屋に来ることとなったため、荷物を整理。3F で少し談笑してから、30 分ほど市内を散策。

7:00 後発隊が泊まることになる Namaste Hotel で夕食。今回の参加者が一同に介する。メニューはダルバートタルカリ。八木先生から、過去に仲間の遺体を冬山で回収した話を聞く。

8:30 頃にホテルへ帰る。路地裏には蛍が飛んでいる。蛍を見たのはいつの日以来だろうか。空には星も一つ見えている。明日、無事にララ湖に到着できることを切に願う。

9月7日（前奎）：スルケットからララ湖へ

昨晚から降っていた雨がやんだと思って安心して寝ていたら、4:00 頃から断続的に強い雨が降り始める。一応 5:00 に起き、シャワーを浴び、6:00 に向こうのホテルに朝食を食べに行く。

朝食が出てきたのは 7:00 頃だったがオムレツとトースト、ティーの充実した朝食だった。北側の山稜が見えていたのでいけると思ったが、朝食を食べているうちに見る見るうちに雲が湧いてきて隠れてしまう。今日は 60% だめかもしれない。

11:40 突然空港へ行くよう連絡が入る。荷物をまとめて、ハイエースで全員が空港に行く。空港で荷物をセキュリティチェック後、計量すると 200kg オーバーしているらしい。八木さんと長田さんが残るということで決着した。しかしダワさんたちが Shree エアと交渉し、なんとか一人だけ残ることで決まった。ダワが次の日のフライトで来ることでスルケットに残った。

13:10 Ms-17 に乗り込み take off。途中雲の中を通



ララ湖に着陸

りながら、また山の低い所を越えながら谷沿いにララへと向かう。ヘリは 3000m くらいの高度で侵入していく。

14:10 ララに到着！！雨が降っているがなんとか荷物を降ろして、ヘリが帰っていった。犬多数。軍人が荷降ろしを手伝ってくれた。

15:00 ちょっと遅いランチ。ララヌードル、パンケーキ（フライ）、サラダ、魚の缶詰、フライドポテト。みなおいしいといって腹いっぱい食べていた。

16:00 荷物（コアリング器機）の様子を見に行き取られないように整理した。軍の指令官にあいさつに行った。このコマンダーがすごい人でエベレストのサミッターで、オリンピックの聖火の責任者だったり、プラチャダ首相の SP やってたりと、すばらしい人。人格もよくて、我々の手助けをしてくれると約束してくれた。

19:00 夕食。ネパール料理とカラアゲ、酢のものとたいへんおいしい。食事の前に血圧を計ると、皆高めだった。（135、103）と自分も高めだった。血圧ネタがかなり盛り上がる。

20:10 外に出ると、少し月明かりが見えた。音がほとんどしない静寂の世界。時々軍から時報の鐘が聞こえる。

明日は晴れてほしい！！

9月8日（寺村）：ララ湖 コアリング機材組み立て

6:30 朝のチャーを各テントに持ってきてくれる。その後はテント内でごろごろ、時間をつぶす。

7:30 朝食。まずおかゆが出た後に、パンケーキ、ゆで卵、サラダ。おかゆにふりかけをかけて食べたら、それだけでも十分にお腹いっぱいになりそう。

8:30 高知大チーム（岡村・松岡両先生）＋山田、中村、



コアリング機材の組み立て



シェルパのクンガ氏

寺村が、コアリング装置を組み立てに出発。

- ・ボート 4 台に空気入れ。1 台にエンジン取り付け。
- ・ポールを三角形に組んだボート 3 台の上にボルトで固定し、その上に三角形の板を 3 枚置き、足場の完成。

10:00 お茶休けい。

10:15 組み立て再開。足場の上に三脚ポール？を立て、中心にウインチ（小）をつるす。発電機をボートにのせエンジンがかかることを確認して、お昼ご飯に。

12:00 昼食。スープ（ララヌードル）、ローティ、野菜炒め、じゃがいも、ソーセージ、お茶。

13:30 組み立て再々開。木の棒にボルト用の穴を開け、ウインチ（大）を固定。ウインチにワイヤーを巻き付けていくが、この作業が大変。最後の方は軍の指令官、副指令官まで手伝ってくれた。感謝です。

15:30 頃 とりあえず、ひと通り装置がほぼ組み上がったところで、手伝ってくれたお礼も兼ねて、指令官と副指令官を、ララ湖クルーズに招待。結構長い時間案内していた。

16:30 頃 ひと足早く、山田さんと一緒にキャンプに帰り、シェルパの人に、お茶を組み立て現場に持って行ってもらおうよう頼む。湖の周囲を歩かれていた長田先生と前奎先生がキャンプに帰って来られ、様子についてお話を聞く。

17:00 すぎ エンジン付きのボートに引っぱられ、組み上がった 3 台のボート＋やぐらがキャンプのすぐそばまで帰航。

19:00 夕食。スープ、ご飯、うりみみたいな野菜、鶏肉、ブロックのソーセージ。

20:00 消灯。

感想：コアリング装置の組み立てが無事完了し、ほっと一安心。いろんな人が協力してくれたのがうれしい。皆

さんに感謝。ずっと腰まで水につかりながら作業をなさっていた岡村先生、松岡先生や中村くんをはじめ、調査隊の皆様もとうもお疲れさまでした。…と書くとも調査が終了したような感じになってしまうが、コアリングは、明日からが本番。ゆっくり休んで疲れをとりましょう。

でも、どうせ、夜中に何度か目が覚めて、トイレに行きたくなるんだろうな…。

9月9日（長田）：ララ湖一周

5:50 起床。テントを出ると、雨は降っておらず、今日は晴れるのではないかと期待をもたせる。東の空の太陽が昇る方がかなりはれ、徐々に氷河をいただく山が顔を出す。

6:20 今日は長い夜を待ちかねた老人組が早々と起きはじめたこともあり、若干早めにお茶をくばりだす。

7:20 朝食。おかゆとトーストそして卵焼き。朝食の前にはいつものように Maya ドクターによる血圧チェックがおこなわれる。山田さんと八木さんがよくないとされたが、前から高いと言われていた三宅さんと長田は大分正常値に近いとのこと。そこで三宅、長田、寺村の三人はララ湖一周し、それを GPS におとすこととする。岡村さんをチーフとするコア採取隊は午前中は水深を計り、午後からコアを採取することにする。

8:30 岡村隊始動。

9:30 三宅、寺村、長田の三人とポーターの四人でキャンプを出発。

10:30 シバ寺と言われる場所に到着。それまでも植物をみたり、湖の魚をみたりしないが、ゆっくりと着く。そこでお茶を飲み休憩。途中援助米を頭にささえて運ぶネパール人に会う。タルチャから歩いてきたという。

11:30 ララ湖のキャンプから見える草地に到着。こ

ちらからみえているよりも水が多く歩きづらい。放牧中の牛、水牛にまじって馬もいた。昼食には早いのもう少し進むことにする。

12:00 やっと草地をぬける。ポーターにいろいろ聞くと、彼の日給は 500 ルピーで、エベレストのふもとに住んでいるシェルパだそうです。今回のポーターは彼と dawa さんだけがシェルパ人であとは Damang、Newar、Sunil と混成部隊と知る。マオイストへの思いもいろいろと語っていたが、これは割愛します。これほど Hindi をしゃべれるとは思わなかった。

12:30 森林地帯のきれたところで昼食。チャパティ 2 枚とチーズ、ハム、ゆで卵と豪華。チャイと一緒にいただく。ここからはララ湖キャンプにつくことを優先させ、スピードをあげる。

13:00 本部前奎さんと交信後歩きはじめる。歩きはじめてすぐタルチャへ行く道との分岐点に到着。このころから雨が降り始める。がけをけずったような道があったり、白砂の浜があったり。松に白浜とは日本みたいだと話をする。

14:00 コア隊がコアをとっているようすを八木さん前奎さんの交信で知る。この辺から足が重く、ただひたすら歩く。

15:30 ようやく、軍のところにつく。ここで急速に足どりが重くなる。ちょうどコアをとって戻る船がみえたと思ったら、八木さんから交信が入る。ダワさんが無事ついたかどうかきかれるが、こちらも知らないと答える。

16:00 ようやくキャンプに帰ってお茶を飲む。ちょうど岡村さんたちも帰ってきたので握手する。われわれの歩いた距離は 25km だと GPS から知る。よくあるものだ。

16:30 疲れたので寝る。しばらくすると大きな爆音がひびく。あとで聞くと、マオイスト時代にしかけた地雷を水牛がふんだのだという。

19:00 夕食。おかゆにスパゲティ、モモ、野菜。どうも歩き疲れたせいかあまり食べられず。ネパールにはじめてきたのは 1978 年。ダージリンから国境を越えタライ平野をえんえんと走り、途中一泊して、30 時間ほどかかった。そのころネパールはインドルピーとヒンディーが蔓延し、インドの属国のような印象だったが、今はマオイストの内戦を経て、ネパール人の国という国民国家意識が確実に定着したかのようにみえた。ただエスノナショナリズムをマオイストがあおったために、内



ガイドのバヌー氏

部分裂もひどくなったとシェルパが語ってくれたのが印象的だった。

9月10日(中村): ララ湖 コアリング

6:30 朝のチャーで起床。

7:30 朝食。ミルクティーにジンジャーを入れるのがはやり。

コアリングに出発。今日のメンバーも昨日と同じく、岡村先生、松岡先生、山田さん、バヌー、私。力持ちの Bhanu は毎日大活躍だ。キッチンテントでバヌーと話をした。家族はジュムラに住んでいると言う。おくさんは看護師で、娘さんがいるそうだ。ネパールでは学費が高く、月 2000 ルピーの学校代の工面がたいへんだと話してくれた。東京で一人暮らしをしていると言うと、家族がばらばらに住むのは不思議だと言っていた。

今日は 2 本のコアがとれた。rara09-2 は 5.5m ぐらい。rara09-3 は 6m ぐらい。

12:30 昼食。13:30 まで休憩。

13:30 コアをばらし、端に封をした。

15:00 rara09-1 をあける。上部に約 10cm の砂層がある他はグレーのシルト。年縞はなし。



ムルマ村の住人



ムルマ村遠景



中国国境遠望

17:30 今日の夕食はヤギをつぶしてソーセージとヤギカレー。ヤギは 8500 ルピー。切った頭を持って記念撮影。

ソーセージとカレーはとてもおいしかった。でも調理風景を思い出すと少し気持ちわるい。夕食は、イタリアから来た夫婦、軍の隊長さんなどとパーティーだった。

外に出ると星空がきれい。星座がわからないぐらい星がたくさん見えた。

9月11日（三宅）：ララ湖 植生調査

5:50 起床。満天の星空から一夜明けて、今日はララ湖に来て最もすがすがしい青空を見ることができた。シスネ山やチーマータレクの山容を見ながらのティータイム。

7:40 朝食。おかゆの後、チャパティにハム、サラダ、ゆでたまご。おかゆだけ腹一杯、一度食べてみたいものだ。

9:00 八木先生を隊長として、長田先生、寺村さん、山田さんたちと 3700m のピークを目標に登山。

9:20 登り始めてすぐに丘の上の寺に到着。屋根に竜と羊の彫刻あり。竜は水、羊は自然の神。Picea

smithiana の木の根元には自然石を利用したご神体あり。ララ湖が眼下に広がる。

10:07 3290ma.s.l. で休けい。ララ湖がきれい。

10:18 ムルマ村が見える。小じんまりとした集落。

11:00 3490ma.s.l. で2度目の休けい。この標高より少し低いところから *Abies spectabilis* が出現を始める。ただし、南側斜面の急峻は斜面では *Quercus semecarpifolia* が優位。北側斜面に *A. spectabilis* のりっぱな林が広がる。*Betula utilis* も混生。ここまで来てよかった。ここの植生の regional settlements がなんとなく見えてきた。6000~7000m 級の山塊が北面に広がる場所で記念撮影。あの風景は一生忘れないと思う。中国との国境が広がる。

11:50 ムルマ村に到着。マツの葉でふいた屋根の下には薪がたくさん積まれていた。大麦、小麦の畑、タバコの畑などが広がる。集落は標高に沿って一直線、畑は斜面をうまく利用して作っている。まるで四国の祖谷に広がる景観にそっくり。子供たちがかわいい。人なつこい。はずかしがり屋さんもいる。うちの子供を思い出した。

13:00 テントサイトに無事到着。ただし、寺村さん



現地住民を診療する Dr. マヤ



鏡のようなララ湖

の右ひざ痛が心配。

13:30 遅い昼食。(美保) ヌードルに、揚げパン、スパイシーなジャガイモ、ウインナー、大根サラダ、チーズなど。

14:20 岡村先生たちは測深に出発。少し休んでララ湖東側の溪谷に出発。途中で冷たい雨が降り出す。溪谷林の種組成を記載。雨が強いのでテントサイトに戻る。

16:20 テントサイトに到着。測深部隊は未だ帰着せず。少し心配。

17:00 測深部隊無事帰着。お疲れさま。

18:20 ダワさん、ララ湖に無事到着。

18:30 お湯割りウイスキーを手にダベる。

19:10 夕食。シチュー風のとりみつきヤギカレー。おいしい。

9月12日(八木): ララ湖 湖底地形測量

9月3日に出発して、9名のメンバーの日記が一巡した。

もう我々の調査行も10日目に入ったのだ。

昨晩はほとんど雨が降っていたように思われたが、6:00頃はなんとかやんでいた。昨日午後の寒さに較べるとなま温い。時折やってくる雨幕も雨のうちには入らない。むしろ今日午前中は風もなく、おだやかな天候だった。朝メシは、水分多めのオカユで三宅さん差し入れのお茶漬けノリが、よくあっておいしかった。

メンバーの行動は、八木・前空・岡村・松岡が測量船によるプロファイリング、山田・寺村はマヤドクターの診察に同行して近隣のムルマ村ヘルスポストへ。三宅さんはさらに下流側の植物調査、長田、中村はBCで文筆活動等にいそしむ。

我々測量船部隊は、風のないベタナギのララ湖をゴム

ボートで快走。シバ神廟での休憩などを経て作業を終了す。12:35 帰投。まさに Mission Completed で爽快。昼食には大根入りミソ汁とジャポニカライスで皆さん満足が思ったが、日本食経験のない Gyawali さんが、ネパールご飯を別メニューでもらっていた。少し気配りが足らなかった。

午後からは八木、前空両名は測量データから湖底地形の概略を計算して作成する。165mより深い部分が湖西側に存在することがわかる。明日は中央・東部の水深160m付近で再びコアリングの予定。

3時半頃から約30分間強く雨が降る。この雨でメンバーの皆さんが帰ってくる。しかし、マヤドクターは村人からの強い要請で診療活動に大忙し。夜7時まで帰ってこなかった。

ララ湖からの outlet から下流側には深いU字谷が刻まれているが、その上の空はほとんど雲がつかない。その上方に雲が出ててもその高度は3500mぐらいいで、そこを通過してヘリやツインオッターがララ湖から東へ抜けていく。多少雨が降っていても空の回廊が開いていることは、我々の撤退路が確保されていることを意味するので心強い。

夕食前から、八木・前空が一杯やり始め、夕食前には多くのメンバーが集まりもりあがる。あと六日間順調に作業が進むことを期待する。

夕食後テントを出ると満天の星空に皆さん魅了される。明日のお天気を期待してしまう。

☆夕食はスープ、ピザ、ナポリタン、ポテトとイタリアンであった。

☆朝の血圧測定では、測定前に降圧剤を服用するという八木のドーピング問題が発覚。マヤドクターにしかられる。



コアリングの様子



コアリングの様子

9月13日（岡村）：ララ湖 コアリング最終日

6:00 起床。体調が良くなったのか？夜中に1回トイレに行っただけ。東の空と山が Margemröte 状態へ。一瞬遠くの峰が黄金に輝く。美しい。神々しい。湖は全くの無風、久しぶりの快晴が期待される。最後のコアリング2本に備えて4kwの発電機に半分ほどガソリンを追加。皆も起きて来た。八木さん、前空さんは3時から悶々としていたらしい。

7:00 朝食。ダルスープ塩味。おかゆにチーズを願ったらキザんだものが出て来た（何をするのかお見通しのよう）。おかゆにキザみチーズをのせ、しょう油を二、三滴たらす。うまい。キャンプ中で一番の味。Dr. マヤも同調。おいしいと言ってくれた。八木さんに一口すめたが、リゾットのようなと言ったきり。主菜は温サラダ、あげパン、いんげん豆。限られた食材で、工夫がすごい。冷蔵庫の余りもので最大の味を考える楽しみに似ている。

7:30 出港準備。船外機と予備ガソリンを積み込む。

8:15 出港。快晴無風。湖面は鏡。

コアリングラフトに松岡、山田、中村、屈強ネパール人の4名。モーターボートに岡村、マヤさん、長田先生でラフトを引く。途中軍のキャンプに寄り、コマンダー参入。奥様が軽い高山病とかで、マヤさんが往診に向かう。コマンダー上機嫌で写真を取りまくる。

9:15 St.5 コア投入。

9:45 St.5 コア掲収。フルにとれた。黄テープは少しでは、3人同時にカッターが出ており、笑。次に何をすべきか、4人が完全にマスター。

10:30 St.6（水深60m予定）へ出発。水深が安定せず。50mの段丘状地形上でコア投入。前空発案ポイ

ント（浅い方が堆積速度が遅い？）。私は粗粒になるのではと思ったが、Tryするのも良いか。浅いので、最低速で降下させる。透明度が高く、コアラ本体、テンビン、パイロットすべてが船上から見える。こわいくらい。吸いこまれそう（キャンプ地の脇にある東屋でこの文章を書いているが、西側に鬼グルミとアーモンドの木があり、実がなっている。クルミは未だ熟してはいないが美味、アーモンドは苦扁桃様で杏仁豆腐の味がする）。

10:40 コアラ着底。引きぬきに最大荷重。発電機ウナリをあげる。イカダが反力で沈む。ぬけた瞬間プラットフォームがとび上がる。（手応えあり）。

11:00 掲収完了。c/cは明色の泥。氷河泥 glacier milkを期待。意気揚々と引き上げる。ヒマラヤの雪峰を背に皆で記念撮影。司令も満足顔。

12:00 強い風吹き始め、波頭が白くくだける。向かい風で船側2kt。司令を降ろし、キャンプ場、繫留地へ向かう。

12:30 Anchoring。ようやく終わった。責任を果たした安堵感に酔う。これでヒマラヤ南麓のスタンダードは作成可能。ここまでの仕事にchallengeされた長田先生に礼を言う。勇気に感謝。

12:45 昼ごはん。スパゲティスープ+こしょう。パンケーキとハチミツ。ドゥドゥチャ。朝のチーズ茶づけが口に残る。明日も所望しよう。ベンチで5分間寝る。2回落下する。ダワさんがもう一度落ちるマネをせよとせまる。しかたなく（好意を無にするものではないので）やる。日本人が教えたのか？ネパールでもやるのか聞きそびれた。

13:30 風強く、白波たち始め、いかだをラッシングし直す。コア切断開始（松岡+中村と寺村）。皆良く動いてくれる。すべてがなごやかに、楽しく、時間が過ぎる。



コアリングの様子



コアリングの様子



コアリングの様子

顔に大ヤケドをした女の子が父親に連れられて来た。泣きもしない。マヤさん二時に 100 人以上の患者が下の Medical Post に来るそうだが、手当を丁寧にやっている。女の子がかわいそうで見られない。松岡さんが 3rd stage の火傷と言い、日本では 3 度という。同じだとのたまう。

15:00 八木・前空帰キャンプ。湖東側のバンクは Terminal Morain だと語る。構成岩石は Amphibolite があると。深成岩（花崗岩）この付近（主に低変成度の schist から成る）にはないので、迷子石系だろう。モレーンだとするとどこから来たのか。ドテの東側は急斜面になり、モレーンから水がもれ出ているとのこと。大地震でもあれば、大水害となり、下流側は山津波に消されることとなるのだろうか。

16:30 ドウドウチャをのみながらゆったりとした時が流れる。皆仕事成功裏に終わり、和やか。満足感を味わっている様。司令一家の訪問を受ける。

17:00 寒くなり、集会テントに入る。ネパールラムをお湯割りにする。体が温まり、筋肉が弛緩するのがわかる。

のり巻きが出た。おかわりする人多し。

19:30 食事終盤。八木さんがナツメロを歌い始める。歌詞があやふやな所はスキップでごまかす。次第に高歌放声状態に入る。「のめく」と言う状態。ロシア国歌、中国国歌まで（インド国歌も 2 小節）出る。

20:45 歌いながら、テントに引きあげる。長田さんはテントの中でも歌い続ける。明日朝起きて来られるのだろうか？皆で星空をながめる。

23:30 寒い。フクロウ（アオバツクか？）が鳴く。
おやすみなさい。あすも良い日でありますように。

9月14日（松岡）：ララ湖 コアリング機材解体

5:30 に起床。昨日は晴れだったが、今日はやや雲が多い。それでも大きくはくずれないだろう。熱いドドチャと洗面用のお湯が、何もしなくても出てくる生活は素晴らしい。

朝食はおかゆ、パンケーキ、ダイコンのサラダ、ゆでたまご。八木さん、前空さん、アディカリ先生は対岸の調査へ出発（ボートで送ってもらった）。コアリング班は「いかだ」の解体作業。バヌーさんをはじめとした強力シェルパ隊の強力により、あっという間にバラバラ。まったく海外では仕事がラクです。天気はいいが、ボー



ギャワリ氏



軍の司令官

トの底板は乾燥してくれない。昼前にはアーミー御一行の遊覧航海を行う。引き船とボート一台でララ湖を進む姿はなんとなくおまぬけ。12 時頃から風が強くなった。昨日も同じなので、このパターンがつづくのだろうか。

昼食はスープ、あげパン、ジャガイモのカレーいため、サラダ、ランチョンミート。キャンプサイトに新しくドイツ人のパーティと平和を願うインド人が加わる。あっという間にインターナショナル。

午後は八木隊も帰ってきて、シャワーしたり、コーヒー飲んだりゆっくり過ごす。雨がパラつくが、せんたくものをとりこむほどでもない。今回もヒマ。この 10 日間ほどでほぼ仕事が終わったということで、何というか、あっという間だった。

夕方から雷雨となる。2 日間も晴れていたのは始めてだが、これだけ激しい雨も始めて。

夕食はみそスープ、パスタ、きのこいため、なすいため、ソーセージ。明日の頂上アタックと荷物の重量制限の話をして、今日は早めにおひらぎとなる。今夜は星は見えない。明日はよい天気になりますように。

そうそう、夕方湖の東側に向かったマヤ先生、山田さん、中村君の 3 名は大雨の中暗くなってから帰ってきた。

マヤ先生はカゼを引いたもよう。お大事に。

9 月 15 日（山田）：ララ湖 登山

6:00 ティーサービス。今日は一部隊員がキャンプサイト向かいの山に挑むということで、いつもより 30 分早い。朝食を済ませ、7:15 にボートにて対岸を目指す。

7:50 対岸に到着。アタック開始。メンバーは長田、八木、前空、アディカリ、三宅、中村、山田及びクンガ、ガネーシュのシェルパ 2 名の計 9 名（敬称略）。ボート移動時は若干雨に降られたがものの、アタック開始からは雨、風ともに無く、状況は非常に良い。約 1 時間おきに休憩をとりつつ、一同山頂を目指す。

3500m を越えたあたりから、明らかに酸素が薄くなる。3700m を通過すると、非常にきつくなる。心臓が脈打つ音が聞こえる。しかし 3800m まで到ると体が環境に順応しはじめた。頂上が見えるとあとはモチベーションで一気に進行することができた。頂上付近はガレ場が続く、さらに道が狭いため、なかなかスリリングだった。なお長田プロジェクトリーダーは 3800m 付近にて脱落。一応富士山超えを果たされた。

11:55 山頂に到達。雲もなく、周囲はまさに絶景。

山頂付近から見下ろすララ湖はとても美しい。ここで一同昼食をとる。標高は 4030m。横になり、くつろいでから下山開始。体力的にはそれほどでもないが、足腰にかかる負担は下山の方がやはり大きい。約 2 時間後、15:15 に岡村・松岡のボートと合流。一同無事帰還。

キャンプに戻ると、我々のキャンプの横にオレンジ色のテント群が。カナダからやって来た女性だけのグループらしい。13 名の旅行者に 40 名の現地スタッフが帯同しているとのこと。しかもすべて女性。

17:30 前空隊長がビールを調達してきて下さった。久々に飲むビールは腹にしみる。うまい。夕食をとり、2000 頃に解散。

テントに入ると、隣のカナダ隊方面から何やら歌声が聞こえる。ビデオ片手に見学へ。現地の女性たちが輪になって、フォークソングを歌っている。カナダ人女性たちのうちの 2 人がテレビカメラと集音マイクでその様子を記録している。暫く見物した後、雨が降ってきたのでテントに戻る。なおこの様子はビデオの暗視モードにて撮影。

9 月 16 日（前空）：ララ湖 撤収準備

6:30 Bed Tea。晴。6:00 の気温 9.5℃。

昨晚も“イノシシ”と思われる動物の訪問を受ける。一度起きて見たが、姿は確認できなかった。ゴミ捨て場を漁っていたようだ。

8:20 湖底地形測深調査。昨日 -171m を記録した地点を確認したが、器機調整の加減により -169m に変更。ララ湖の最深部は -169m（暫定）でほぼ決まり。昼食後一休みする。本日の昼食はネパリカナだった。マヤドクターの減塩指導により、やや味付が甘めであり、ちょっと不満であった。

13:30 から、測量船と器具の最終撤収作業にかかる。サンプルその他、すべてヘリポートまで運んだ。その間、手伝ってくれた村の青年を、少し遊覧船で遊ばせてやる。15:30 から夕立のような雨。風が強くなり、発電機のガス抜き運転の途中で中断し、テント場に帰る。ほぼ撤収終了。8 日以降 9 日間活動してきたゴムボートも本日で営業終了。ご苦労様でした。

19:00 から食事。チャーハン、パスタ、コロッケ、キャベツのサラダ。たいへんうまかったのでおかわりした。空は満天の星。明日は最後の日。ゆっくりとララ湖を楽しもう！！



下山完了

追記 この日の晩に、村の青年団の寄合のような会合が夜 8:00 頃から裏のゲストハウスで始まり、3:00 頃まで歌と踊りでさわがしかった。夕方晴れ間がみえるのに大雨だった（きつねの嫁入り。ネパールではジャッカル（結婚）のためか、人間も男女の出会いがあったのではないかと想像した。

ネパールでは地方の人口が減り、カトマンズの人口が増えているらしいが、まだまだ Mugu のような辺境の地では子供の数、若者の数が多く、活気がある。

9 月 17 日（寺村）：ララ湖 最終日前日

6:00 起床。最終日は明日だが早朝にヘリで飛ぶだけなので、実質は今日が最後。長田・山田・中村 3 氏は 5:00 起床で日の出を見に近く展望台へ行った模様。（結果は太陽のところだけ雲がかかって、見る事ができなかったらしい。）

6:30 お茶。洗顔のお湯。

7:30 朝食。パンケーキ・サラダ・チーズオムレツ・おかゆ。

調査も終盤でふりかけ等を使い切ってしまう、おかゆに味噌汁のもとやコーンスープのもとなどをふりかけがわりに使用。意外とおいしいようだ。

8:30 8 時頃に、昨夜から隣のロッジに宿泊に来ていた小、中学生？のうちの 7~8 人がたいこを持ってキャンプに遊びに来る。昨晩は午前 3:00 頃までさわいでいたようで、調査隊の何人かはよく眠れなかったらしい。歌声とたいこの音がうるさくて。が、女の子達が歌いながら踊り出すと、みんなで写真撮影大会に。

8 時半過ぎ、前空・八木・三宅・中村・寺村の 5 名がシェルパのガネーシュとムルマ・ピークを目指してキャンプを出発。出発早々展望台付近で寺村が脱落。キャン



キャンプ来訪者

ブに帰る。それほど体調が悪かった訳ではないが、少し登っただけで何となく頭がくらくらしたので、無理をしないでおこうと思った次第。他4名は予定通りムルマ・ピークを目指す。

9:30頃 キャンプに帰投す。10~15分ほど休んだ後、ドクターマヤ氏と山田氏とバヌー氏、クング氏の5人で、ホスピタルオフィスに向かう。

11:00頃 ドクターは診療所で診察。山田・寺村は部屋の中で休憩したり、付近を散歩したりして、時間をつぶす。

12:30頃 ようやく診療終了。普段医者が常駐していないので、ドクター・マヤは大活躍。忙しそうだが、患者者のみんなに頼られているというのが良く分かる。すごいな。その後ドクターがムルマ村に行きたい、ということで、4人（マヤ氏、山田氏、クング氏、寺村）でムルマ村に向かう。途中で持ってきていたランチで昼食。

14:30頃？ 村に向かう途中で、午前にムルマ・ピークを目指して登頂に成功された前杵・八木・三宅の3氏と出会う。ちょうど村を通過して山から降りて来られたところ。中村氏はシェルパと二人で別行動らしい。休憩がてら3氏と話をしていたら、下から長田氏が登って

こられる。キャンプでずっとじっとしている事にあきられたのだろうか？結局5人になってムルマ村を目指すことに。

15:00すぎ 無事村に到着。小、中学校の校長さんに会い、1110ルピーを寄付。教室と生徒の数は多いのだが、教師が2人しかいない、とのこと。日本とは違い、ネパールの教育事情はかなり厳しそう。学びたくてもお金がない。あるいは勉強しても将来は嫁に行くだけ、という現実が…。

帰り際に「将来の夢は？」と聞いて、「14歳くらいになったらお嫁に行って子供を育てなきゃいけないから、特になりたい職種とかも無い」という10歳前後の女の子の気持ちを聞くと、なんとなく悲しくなる。しかし、ここではそれが「普通」なんだな…。

余っていたクッキーなどのお菓子をプレゼントするが、人数が多く、生徒さんひとりひとりには、ほんのひと欠けらずしか行きわたらない。それでも、みんな行儀よく並んで順番待ちをして、おいしそうに食べてくれた。十分な量がなくてごめんなさい。

16:00すぎ 帰途につく。が、道中でドクター・マヤ氏は次々に患者さんにつかまる。診察は無理でも、色々相談をもちかけられる。道端であろうと構わず相手するマヤ氏。大変そう。そんなこんなでキャンプに帰りついたのは結局18:00前頃。ところがおもわぬおまけ。ムルマ村の9歳くらいの女の子2人が、別れを惜しんで、キャンプまで一緒に来てくれる。ミルクティーと岡村先生作のおまんじゅうを食べて、お礼にかわいい歌をひろうしてくれた。名残おいしいが、19:00少し前にお父さんみたいは人と一緒に、村に帰って行った。山田氏に「来年も来てね！」と言いついて残して。

19:00すぎ 夕食。最後（になるはず）の晩さん。

食後にケーキが！！おいしかった。中村氏がネパールの伝統音楽の歌と踊りをひろうしてくれたのをきっかけに、スタッフみんなをまじえての、日・ネ歌合戦に。特に、ゲワリ氏の歌と踊りに、大いに盛り上がる。最後は和田アキ子の「あの鐘を成らすのはあなた」の大合唱でお開きに。

その後、外に出たら山火事？のようで、遠くの空が赤い。明日は6時起床、6時半朝食、7時半にはヘリポートへ行く予定。早いのでもう寝よう、と思ったが、この日記があるので、書いています。今はちょうど10時の鐘がなりました。

P.S. 夕食後に軍の司令官と副官さんの2人とその家族

がキャンプに来て、ネパール陸軍のマーク入りの帽子をプレゼントしてくださった。とても記念になります。それもひとり1個ずつ。ありがとうございました。

9月18日（中村）：ララ湖からスルケット村

6:00 起床。6:30 朝食。ララ湖最後の食事とてもおいしかった。

8:00 すぎ へり到着。ネパール帽子をかぶって軍の司令官家族とおわかれ。このネパール帽子、私がかぶってもファーストフード店員にしか見えないようだ。踊りのギャワリさんは今日は眼鏡で、もとの知的なイメージに変身していた。さすが帽子がよく似合う。

9:00 すぎ 離陸。回転しながらバックして、再び高度を下げたので、重量オーバーかと思ったが、いきなり前傾して急加速で発進した。

天気がよく遠く山がとてもきれいだった。

10:30 スルケット着。熱い。クンガさんを残してホテルへ向かう。昼食はネパール定食。

12:30 再び空港へ。トラックへ荷物を積み込む。炎天下での作業で皆バテ気味。

15:00 ホテルでビール！！うまい！！その後夕食までは自由時間。スルケットの町を散策した。

19:00 夕食。ネパール定食。毎日食べ放題なんて夢みたいだ。今日も山盛りにおかわりをした。夕食後、前奎先生の部屋に集まり2次会。楽しい夜となった。帰る日が近くなって来たので皆さん感慨にひたっている様子。カトマンズでも有意義な時間を過ごしたい。

9月19日（三宅）：スルケットからカトマンドゥへ

7:00 起床。7:30 にドゥドゥチャ。

8:20 遅い朝食。トースト2枚にオムレツとドゥドゥチャ。オムレツの青とうがらしがきいていておいしかった。牛乳入りの濃厚ティーに皆で満悦。

9:20 中村さん、ダワさん、クンガさんと町中を散策。スカート、ハンカチなどを購入。中村さんはポスターを購入。

10:00 熱いシャワーを浴び、テレビのチャンネルをひねる。クリケットを見る。植物の同定をする。カトマンドゥにもどっても同定に時間がかかりそう。

12:00 スルケットを出発。車がよく快適な道中になりそう。Sal forestが続く。

13:40 昼食。行きと同じ場所でヒツジカレーを食す。魚の唐揚げも食べる。まずまずの味。

15:40 ネパールガンジに到着。蒸し暑い。空港で手続きをして飛行機を待つ。

17:45 予定時刻を30分ほど過ぎたものの、無事にネパールガンジを発つ。到着した飛行機が再びカトマンドゥへ飛びたつまで実に15分のみ。すばやかった。ヒマラヤの鋭峰は雲のため見えず。

19:00 カトマンドゥに到着。

19:30 Sunset View Hotelに無事到着。八木先生、長田先生ほかの出迎えをうける。とりあえず皆無事でよかった。

20:00 夕食。ビールが冷えていて実にうまかった。皆思い思いの料理に舌鼓をうつ。

21:30 散会。今日はゆっくり体を休めましょう。

P.S. ネパールの植物をじっくり観察する機会を与えて下さって、どうもありがとうございました。ゆっくりと植物のみをこんなに長い時間観察したのは、おそらくこの10年ほどありませんでした。日頃、些末なことに追われ、本質を見失う余裕のない生活をリセットする意味でも、大変ありがたい貴重な時間でした。このプロジェクトにおける私の研究、役割はむしろこれからですが、有意な結果を出せるように頑張りたいと思います。今後ともご指導の程、よろしくお願いします。



Shorea robusta (Sal) forest



ムルマの子供たち

MoU 締結のお知らせ

インダスプロジェクトでは、今後のプロジェクトを進めるために以下の大学と MoU（研究協力に関する覚書）を新規、また再締結しましたのでお知らせします。

2009 年 11 月 1 日にグジャラート州ヴァドーダラーに所在するマハーラジャ・サヤジラーオ大学（Maharaja Sayajirao University of Baroda）と新規に締結し、同日ラージャスタン州ウダイプルに所在するラージャスタン・ヴィディアピート（Rajasthan Vidyapeeth）と再締結しました。

また、年度内にハリヤーナー州ローフタクに所在するマハーリシ・ダヤーナンド大学（Maharshi Dayanand University）とも締結する予定です。

今後の研究展開にご注目ください。

（遠藤 仁）

国際学会開催のお知らせ

この度インダスプロジェクトでは、ラージャスタン・ヴィディアピートおよびグジャラート州考古局（Gujarat State Department of Archaeology）と共催してグジャラート州ブージュで 1 月 28 日～1 月 31 日までの 4 日間の国際学会を開催することになりました。開催間際のご報告となつてしまい申し訳ありません。日本からも多数のプロジェクトメンバーが参加する予定です。国際学会のタイトルと内容は下記のとおりです。

Bhuj Round Table 2010

Gujarat Harappans and Rural Chalcolithic Cultures

28th January

Inaugural

Chairperson: Prof. M.K. Dhavalikar, Former Director, Deccan College, Pune.

Chief guest: Prof. Kanti Gor, Former Vice Chancellor, Pt. Shyam Krishna Verma Kachchh University, Bhuj

Toshiki Osada: Introduction of Indus Project

First Session Chairperson: M. Tosi

D.P. Agrawal

The Harappan Studies: Points to Ponder

M.G. Thakkar

Neotectonic Evolution and Quaternary Episodes in Kachchh

M.K. Dhavalikar

Harappan Enterprise in Western India: new facets of an old Civilization

Rajesh Sashidharan

Distribution of Harappan and Regional Bronze Age folks in Gujarat

Second Session Chairperson: D.P. Agrawal

R.S. Bisht and Y.S. Rawat

The Harappans in Kachchh: In Retrospect and Prospects

J.S. Kharakwal, Y.S. Rawat and Toshiki Osada

Kanmer Excavation

Endo Hitoshi

Mature Harappan Lithic Assemblage at Farmana and Kanmer

Charu Smita

Lithic industry of Bagasara, Gujarat

29th January

First Session Chairperson: M.K. Dhavalikar

Pankaj Goyal and P.P. Joglekar

Animal Utilization Patterns at Kanmer, Gujarat

Anil Pokharia

Plant macro-remains from the Harappan settlement at Kanmer:

A preliminary contemplation

M.D. Kajale

Palaeoethnobotany of Harappan sites in Western India with

Special Reference to Gujarat: Visiting old problems with fresh approaches

Ambika Patel

Harappan Copper Artifacts from Bagasara, Gujarat: Cataloguing and Conservation

Second Session Chairperson: Asko Parpola

V.H. Sonawane

Anarta Culture: A regional Chalcolithic Tradition of North Gujarat

Prabodh Shivalkar

Padri and Anarta Culture: A Rethinking

V.S. Shinde

Harappan Culture in Saurashtra, Gujarat : A Regional Manifestation

Third session Chairperson V.S. Shinde

K. Krishnan

Micaceous Red Ware

Ajithprasad P

The Pre-Prabhas Pottery and the Early Chalcolithic Cultural Developments in North Gujarat

Katie E. Lindstrom

Building Up from our Foundations: An Integrative and

Comparative Approach to Ceramic Classification and Analysis as Applied to Gola Dhoro (Bagasra), a Craft Manufacturing Locus of the Indus Civilization

Fourth Session Chairperson: V.H. Sonawane

K.K. Bhan

Review of Prehistoric Pottery from Gujarat

Akinori Usuegi

Ceramic styles in the pre-/Early Harappan period in India and Pakistan: a comparative study.

Randall Law

Harappan rock and mineral acquisition and use patterns in Gujarat

30th January

First Session Chairperson: Toshiki Osada

P.P. Joglekar and Pankaj Goyal

Animal Diversity at Harappan Sites in Gujarat

Takao Uno and Hirofumi Teramura

3D Images of Seals and seal impressions from Kanmer

Gregg M Jamison

Harappan Seals in Gujarat: A Comparative Analysis

Asko Parpola

Crocodile in the Indus Civilization and later South Asian tradition

Vivek Dangi and Manmohan Kumar

Pre-Harappans(so called Hakra Culture) of Upper Ghaggar Basin

Second Session Chairperson :Y.S. Rawat

Dennys Frenez and Maurizio Tosi

The "Lothal Revisitation Project". A Multidisciplinary Research Program designed to reconsider the South-easternmost Hub of the Indus Civilization on the Arabian Sea.

Kuldeep K. Bhan

Harappan Trade and Organization of Specialized Crafts in Gujarat, India

Hansmukh Seth

Archaeological Explorations in South Rajasthan

K.P. Singh

Water Management at Kanmer

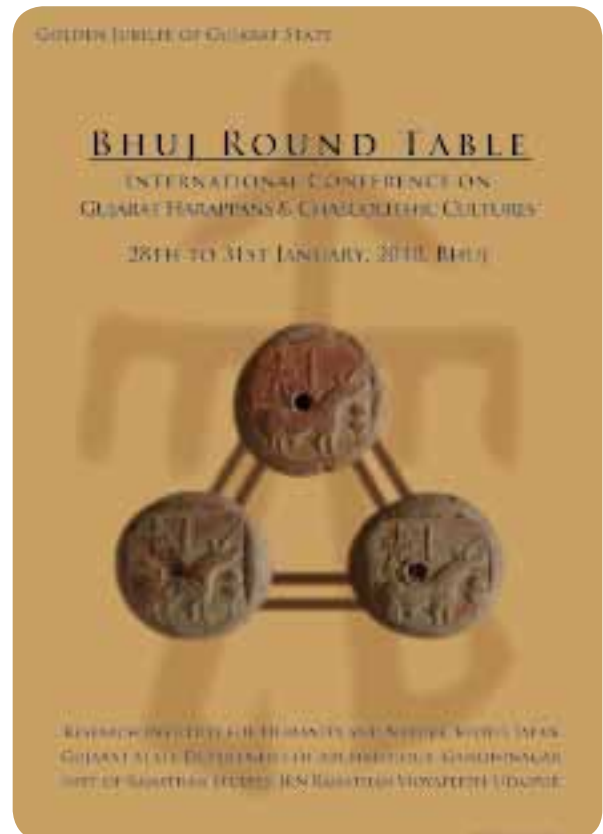
Third Session

General discussion on Pottery

K. K. Bhan, V.S. Shinde, Ajithprasad, P., Y.S. Rawat

31th January

Excursion to Dholavira



編集後記

インダス・プロジェクトも3年目がほぼ終了し、ニュースレターも第6号まで発行できました。

編集者が海外出張していることが多く、ニュースレターの発行が遅れたことをお詫び申し上げます。次号は4月中に発行する予定です。多くのご寄稿を期待しております。

最後になりましたが、今号にご寄稿くださった方々に篤く御礼申し上げます。(遠藤 仁)

インダス・プロジェクト ニュースレター 第6号

プロジェクトリーダー 長田 俊樹

編集・発行 インダス・プロジェクト

発行日 2010年1月25日

〒603-8047 京都府京都市北区上賀茂本山 457-4

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

総合地球環境学研究所

URL: <http://www.chikyu.ac.jp/indus/index.html>

(遠藤 仁)